奈良ゆみより

パリ、2013 年 3 月 1 日

想い出が翼を拡げるとき

これはみなさまへのお手紙です。このたび、CD「声の幽韻—松平頼則作品集 III」が完成し、新しい生命を与えられ飛び立つことができます。感謝の気持ちにあふれています。

みなさまに、松平頼則先生との出会い、この CD を作るまでの由来をお聞き頂けたらと、全てを書き留めたいのですが、どんなに長くなるか見当がつかず、ここにほんの僅かに過ぎませんが認めさせていただきます。

多分 1987 年に、ドイツのボンの歌劇場でグロボカールの作品を歌っていたある夜、楽屋に突然訪ねて来られた方が、息子さんの松平頼暁 さんで、作曲家だということを知りました。その翌年に私は初めての CD「エリック・サティ歌曲全集」を録音し、東京で幾つかのコンサートが催されることになりました。その折に「うちの親父も作曲家で、フランス音楽に傾倒しています、是非呼んでやってください。」と云われて、お父様の頼則先生が、大森にある“山王オーディアム”という小さなホールにお見えになったのがきっかけです。

その一ヶ月後には、パリに、『二星』という曲を書いてお送りくださり，私はその冬のラジオ・フランスのコンサートで初演しました。それ以来、お亡くなりになられる前日まで１３年近くの間、殆どの作品を私の為に書いてくださいました。私は当時、ヨーロッパの現代音楽はよく演奏していましたが、日本の作曲家についてはあまりよく知りませんでした。松平頼則のヨーロッパでの活躍は 1950 年代頃には相当なものであったことを、フランスの作曲家やラジオやフェスティヴァルのディレクターから聞いて初めて知りました。彼らは口をそろえて、「マツダイラは日本の偉大な作曲家、真の芸術家だ！」と云われて、そうなのか、、、と思いました。メシアンも彼の作品の『七つの俳諧』の中の一曲を松平に捧げていることも知りました。私が’90 年代になって再び松平の作品を歌い出すと大きな反響を得て、あちこちで松平の作品が演奏され、ラジオ・フランスやリヨン国立管弦楽団、ノーベル平和賞の記念ミサの為の委嘱がなされ、そして、パリやベルリンでは、源氏物語のオペラが上演され、ザルツブルグの音楽院“モーツァルテウム”に於ける POETIK というフェスティヴァルでは、松平頼則を招き２週間に渡って、彼のセミナーと作品のコンサートが催されました。私の母が亡くなったときに書かれた『時の流れの中の 2 つのエピソード』がフランス国立管弦楽団で演奏されたとき、それを聴いていたデュラン社の当時の社長スカラノ氏は、松平の未出版の１４０曲について出版権を求め、松平はそれにサインをしました。デュラン社は、これまでにドビュッシー、ラヴェル、メシアンの作品を出版しており、松平先生はその提案を受けたとき、夢が叶って大変喜んでおられたのを思い出します。

今回の CD は、昨年５月に先生の晩年の作品から選曲して、相模湖畔のホールで録音を終えました。録音される小島さんは、この音楽が漂い振幅する宇宙の空間を用意してくださいました。選んだ晩年の作品は、不思議な魔力を持っていて超絶技巧を強いられる難曲であるにもかかわらず、私達は、お琴 のてん・仁智 さんも打楽器の上野信一さんもアルトーさんも、音楽の麻薬に酔った如くに、非現実な空間と時の中でみんな一体となって演

奏することができました。 フランスから録音の為に駆けつけてくださったフルートのアルトー氏は「他と比べることが出来ない、日本の至高の美を語るマツダイラの作品を録音できて幸せな時を過ごすことができました」とおっしゃってパリに帰って行かれました。

その後、CD 制作にあたって、今までの I 集と II 集の楽曲解説は松平先生ご自身が執筆されたのですが、今回は私の担当となり、これは、いつものような散文というわけにはいかなく、作品へのカギとなる先生の言葉が見つかるかもしれないと、今までの松平先生に出会ってからの資料、戴いた手紙ファックスを全て取り出し集めて、まず整理しました。引っ越しで失った時期のものや、ファックスの字が判読出来なくなってしまったのを現実に見るのは、胸がえぐられる思いでした。薄くなっていても何度かコピーを重ねるとかろうじて読めるものもありました。これらの膨大な数のコピーを夏の終わりから、何日も何日も重ねておりました。大変な仕事ではありましたが、幸せな時でした。戴いた手紙、ファックスは一枚たりとも書きなぐられたような文章はなく、全てがまるでスコアのように美しくそれぞれに完結されていました。やりとりをしている最中は 私も慌ただしい中で何とも思わなく読み過ごしていたものが、こうして先生がもう居られなくなってから、あらためて読み返すと、宝物であることが判りました。愛の言葉も多くありますが、それらはいつも創作の虹となって天上に昇って行きます。そして、先生の思想、作曲への発想、技法について、歴史について、詩の魂、、、、始めは幾つかをノートに書き写していましたが、もう間に合わなくなりました。CD の中にも一つ載せましたが、ここに少し写します。

…私の音楽に大きな影響を与えたのは生物学の「遺伝（雑種）の法則」私は赤いカナリアを創造したい。それには雅楽と現代音楽の共通因子を見つけること。

（1996 年 10 月 27 日）

…Yumi の récital についての印象……私は一生あの白い漂う美を見ることはないだろう！…

（1997 年 1 月 4 日）

…散吟打球楽を書き始めました。Soprano に Piano,Flûte のヴィルテュオーゾ的な音の流れで華麗に包み込む歌にしようと思っています。つまり Yumi に華のブーケを飾るつもり。音が多いのでちょっと時間がかかるかもしれません。……（2001 年 10 月 18 日、最後に戴いたファックス、この散吟打球楽は未完となりました。）

現在は、これら全ての文書を失わぬように大切に保管することを考えています。

松平頼則先生に出会ってから，この世を去ってしまわれるまでの１２年の歳月には、沢山の作品が生まれ、これまでには、ほんの一部だけが演奏されてきました。94 歳で亡くなられる直前まで、体は弱ってゆかれましたが、精神は気高く、感性は鋭く、先生の言葉は、水晶の棘が自然界の光に反射するように、様々な現象に心を映しておられました。

思い出します。私との出会いで源氏物語の女達が詠んだ歌を書かれ（その連作が後に、オペラとなり、また『宇治拾帖』の大作を 90 歳を過ぎてから完成されました）それをテーマにして、初めて松平作品を歌う為に帰国したときのこと、私はまるで大アーティスト

のように、空港にはハイヤーのお迎えで、一流ホテルの広くて美しい部屋に滞在させてくださいました。申し訳なくて「こんな大きな部屋は必要ありません。小さなお部屋に替えてください。」と申し上げると、「あなたは夢を語ってくださるアーティストです。夢を漂わせる空間は当然なことです。」とお答えになりました。大変なおもてなしで、一度お礼にお伺いしたいとお願いしてもお聞きくださらず、あるときほぼ強引に、花束を抱えてお家をお訪ねしました。東中野の住宅街にあるお家は、私が泊めて戴いている夢のような豪華な部屋とはほど遠く、時代から取り残されたような小さくてトタン屋根の物置のようなお家でした。モンマルトルにある、サティの住んでいた家が思い出されました。扉が開き奥様が出て来られたとき、あまりにもの控えめな美しさに、思わず抱きしめてしまいました。ふと手に触れると、お召しになられているカーデガンのひじにはつぎがあたっていました。胸が痛くなりました。

お二人とも、どこまでも透き通った眼差しと微笑みで迎えてくださいました。「どうしてこんなに？」と思わず申し上げると、松平先生は「子供の時には、欲しいものは何でも手に入り、お池にはボートを浮かべて白鳥と遊んでもいたけれど、自由がなかった。父母にさえ直接話すことは許されなかった。淋しかった。今はなにも無いけれど、でも自由があるんだ。」とおっしゃっていました。

それから、帰国するたびにお訪ねして、ときにはお食事を作って差し上げたり、少しお手伝いもしました。ご一緒する時間は、どきどきするほど楽しく心がときめき、お話は音楽の歴史の宝庫であり、言葉は詩の泉のようで、奥様の雪さまは、戦中から耳が聞こえなくなられたそうですが、それでも筆談でお話が出来ました。詠まれた歌を恥ずかしそうに教えてくださいました。あるとき私の手をとって「いつまでも則様を捨てないで下さいね！」とおっしゃいました。コンサートには必ずお見えくださり、「聞こえなくても良い作品か良い演奏か判るの」とも、「私は悪い妻です。作曲家の妻なのに夫の作品を聴くことができないのですもの。申し訳なくて」と、涙を浮かべ、心を開かれてお話をしてくださいました。こんなに夫を愛する妻を私は知りません。おいとまして外に出ると、毎回のように、お風呂上がりのような軽く爽やかな気持ちで風を頬に受けたことを思い出します。小屋のようなお家には扉の上に、かまぼこ板に墨で“松平”と書かれた表札がかけられていました。そして扉の前の小さな庭には、先生の大好きな藤棚と蝶を育てるためにみかんの木が植えられていました。パリとのファックスのやりとりでは、藤の花が咲く美しい季節がめぐって来たこと、黒アゲハ蝶が今朝、さなぎから孵り羽を広げて飛び立ちました、と書かれてあり、こんなにも優雅な心は何ものにも代え難いと思いました。

およそ世の中の物欲と云われるものからはほど遠く、社会での野心も微塵も感じられませんでした。美しいことと、愉しいことの舞う世界に心を漂わせ創作することが一番の目的として生きておられるようでした。その為には、どんなにご自分の中で揺るぎなく選択し、その輝くものに刃物を持ってひたすら向かう努力をされておられたことでしょう。それを誰よりも理解し見守られたのが、雪夫人だといつも感動していました。それから、あるとき先生の友人で仏文学者でもある、宇佐見英治さんに昼食に私も一緒に招かれたことがありました。それは大泉学園にあるうなぎ屋さん“ふな与”で、それ以来そのうなぎ屋さんのご主人と意気投合されて、亡くなるときまで、大の親友であり、秘書でもあった、竹島善一さんという、もうこの時代には見られない江戸っ子の粋の極みの風流人に出会われたことで、先生の晩年はとても豊かで愉しい日々になったことと思います。竹島さんは「ただ者」ではなく、40 年前から会津の風景を撮り続ける写真家でもあります。ここに

また心の優しい少女のような奥様が竹島さんと一緒に松平先生ご夫妻を見守っておられるご様子に私は遠く離れていても、安心して演奏活動に専心することが出来ました。

あるとき、 野平一郎さんの為にピアノ・コンチェルトを書かれることを、私が提案したことがあるのですが、1ヶ月ほど経って、竹島さんが、「ところで、あのピアノ・コンチェルトはどうなりましたか？」と尋ねられると、「ん？あれね、もう書いたよ。」とおっしゃり、「え？何処にあるのですか？見せてください。」と竹島さんが返すと、「もう出来てるの、頭の中に。後は五線紙に写すだけ。」とおっしゃったそうです。そしてまたあるときには、「ぼくの書いたものなんか、ただの紙切れにしか過ぎない。演奏してもらって初めて作品になるんだよ。」ともおっしゃったそうです。私には、『ラプソディ』という小編成オーケストラの作品のパート譜を、以前カルフォルニアで演奏されたときに作ってあったのをすっかりお忘れになられて、1996 年のザルツブルグでのときに、またもの凄く高いお金を払って作られたことを知り、「まあ、よりつね先生、もったいないことを！」と申し上げると、「いいの。ぼくが忘れて悪いんだもの。」と、次の瞬間にはもう別の話題に移られたことも思い出します。

源氏オペラの武生市文化会館での初演のリハーサルの時に、歌っていると薄暗い会場から、繰り返しパン！パン！と木を叩くような音がしていたので、後で先生に「何か雑音が聞こえませんでしたか？」とお尋ねすると、「あれね、演出家がぼくの音楽の邪魔する演出をするもんだから、ぼくも仕返しに舞台の邪魔してやった。椅子をスコアで叩いてたの。」とおっしゃって、何とも云えずおかしく思ったのも思い出します。

松平先生は、私の“出現”が創作へのインスピレーショを与えたとおっしゃいます。でも、私にとっては松平先生は、先生の作品を演奏するようになって、声の根源に微睡む可能性に問いかけ、新たな声を開拓することができた稀な作曲家だと云えます。書かれている譜面を見ると、まず第一に余りにも細かい音の装飾音、音程の跳躍の激しさにお手上げになってしまう、どうすればこのスコアが歌えるのであろうか？途方に暮れて先生に幾度申し上げたことか、、、その度に相談しながら、書き換えてはくださるのですが、依然として難しく、先生は「それは演奏家を信頼して尊敬しているから、あまり簡単だと失礼になると思って」とおっしゃる。後になるにつれて理解出来て来たことですが、演奏家が限界に挑むときに起こるある真実というものを大切にしておられたのか、それを教えて下さったのかと。その瞬間に存在するスピリットを。それらの楽譜を歌い上げるためには、決して譜をなぞって演奏するのではなく、譜が生まれる前のエネルギーとその魂を想像して体感すること、それは綿密に瞬時に自分自身を捨てて行くこと。その方法を試みているうちに、自然に譜に現れた音楽が、私を通っていとも自然にほとばしり出ることを知りました。それはまるで哲学の分野のようで、言葉の生まれる前のその根の営みに身を置くことでなないかと思いました。他にはシェーンベルク、とジャン＝クロード・エロワが私にとっては同じ様に声を発掘させてくれた作曲家でした。

松平先生は 2001 年 10 月 25 日に旅立たれました。その日、竹島さんがお電話をくださいました。その一時間前に 18 日に書き終えられた最後の作品『鳥の急（迦陵頻）』を郵便でお受け取りしたばかりでした。お亡くなりになられた後には、パリ、東京、大阪、ザルツブルグ、エジンバラで幾度か先生の作品のコンサートを重ねて来ました。でもこの最後の作品を含めた晩年の作品集を何時か録音に残したいとの願いが募ってきました。それは松平先生の、亡くなられる直前までその作曲技法の探求を続けられたその歩み、書法の変遷に幽玄に漂うような美しい芸術を世に残したいと思い、残すべきだと思うようになり、

この CD 業界の困難な時代に、ましてや決してお商売にはなり得ない現代音楽の作品集など、たとえ松平頼則であろうとも、決して出してはいただけない、それで、助成を受けることを前提として、出して頂ける約束を得て、録音をしてしまいました。その助成団体も消えてしまったのですが、しばらくはそのことは、考えずにひたすら、制作を完成させることに没頭していました。前に記しましたように、遺された資料を通して新たに先生の思いに、お考えに触れ、近づくことに精魂をかけていました。

昨年の１２月に毎年コンサートを催して下さいます、飯田精三さんにこのお話をすると「このことは、企業などが援助するのではなくて、我々一人一人が志を持って力を合わせ支えて行く日本の文化なのだ」と早速コンサートの折りにお客様にお話してくださって、私はそのお言葉をとてもうれしく思いました。そして、飯田さんのお勧めも受けて正式に、みなさんにお願いをいたしますと、こんなにも熱くご支援を戴いて深く感激いたしております。また、同志社女子大学からも後援してくださることになり、いよいよ CD 出版が現実になりました。

実際の制作に当たっては、始めはこの制作を躊躇しながら受けて下さった ALM のスタッフの方達も、全員が、もう数字などすっかり頭の上遥か遠くに飛んで行ってしまったように、最良の作品に仕上げる為に力を惜しまず励んでくださいました。表紙のデザインだけでも、どれだけの案が届いたことでしょう。どれもこれも素晴らしく選びがたいものでした。私自身も、こんなに制作に関わったのは初めてのことで、ブックレットの校正などが、遅れに遅れ、でも何とか２月半ばに工場に見送るまでそれは大変な思いをしましたが、みなさんのお心に感動しながらのことでしたので、幸せでした。

松平先生に聴いていただけないことは淋しいですが、でも先生の魂が復活すると思えばうれしいことです。

この１月に石岡にある照光寺にお墓参りをしました。 録音風景をすべて映像に収められた，映画作家の宮岡秀行さんがレンタカーで連れて行ってくださいました。 亡くなられてから初めてです。お寺の住職さんも雅楽を演奏され、松平先生のご生前にはよくお話をされたと語って下さいました。 本堂に案内されると、そこには松平家代々の位牌がまつられ、先生と雪様のご位牌が一番新しく金色に輝いていました。本堂は薄暗く、大きな阿弥陀如来が座していて天上からは極楽浄土の金色の飾りが下がっていました。松平先生の魂が天上に、極楽に、光に誘われて昇っていくように思われました。まさしく、この闇に浮かぶ極楽浄土こそが、松平頼則の世界だと思いました。

そのあと、日暮れ頃、東中野にあるあの先生のお家をお訪ねしました。11 年過ぎてまだ残っているものかもう既に壊されて跡形もなく別な建物が建っていたらと、とても恐かったのですが、そのまま遺されていました。

小さな庭は枯れ草に覆われていましたが、藤棚は春を待つ固い芽をつけていたし、みかんの木は夜の中に緑の葉が艶やかに光っていました。かまぼこ板の表札は上の部分が雨だれで半月形に朽ち落ちていましたが、かけられたままでした。あの扉の左の窓の格子の向こうで先生は仕事をしておられました。あの壊れたピアノも、楽譜が乱雑に重ねられた机は、今はどんな様子なのでしょう？

松平頼則先生の魂が，今、翼を拡げてこの新しい作品集から飛び立って行くことが出来ますように！新しい生命が育まれるとき、、、。